

# ホームヘルプ事業推進者、 竹内吉正の生育的背景とその家庭的影響

— 父、花里吉次郎の聖徳太子研究と家訓「以和為貴」—

中 畠 洋

## I. はじめに

複合化・複雑化した福祉的課題を受けとめ、多機関・多職種の協働による包括的な相談支援体制の構築を進めることが地域共生社会の実現において期待されている。反面、人々の歴史認識やそこから学ぼうとする謙虚さは忘却されていないだろうか。今までの社会事業史研究の主流は、著名な人物・機関・施策などへのアプローチや国際比較研究などが主流であったと言うと言い過ぎの感があるかもしれないが、今後は、旧来のような知名度や注目度の大きさのみではなく、史実や史的根拠に基づき、将来の方向づけや示唆を与えるような人物や実例にしていねいにアプローチする必要があると考える。また、社会福祉士国家試験科目から「社会福祉史」が除外されている今だからこそ、通常の授業や学生指導において、むしろ、史的観点からの教育・教示がよりいっそう重視されなければならないだろうし、社会のあらゆる人々においても、成育歴や家庭環境などの過去の歩みを省察し、歴史から学ぶ姿勢を強調する必要があるだろう。

このような問題意識に基づいて、本稿では、日本初の組織的なホームヘルプ制度である家庭養護婦派遣事業を推進した実質的な立役者とされる竹内吉正（1921.1.15-2008.12.14、以下、竹内）の思想研究の一環として、彼の実父、花里吉次郎（1886.1.27-1937.9.28、以下、吉次郎）に焦点を当て、

戦後日本のホームヘルプ事業推進の背後にあったキーパーソンの生育的背景や家庭環境などから、竹内が影響を受けていたと考えられる実体験や思索・熟思を具体的に照射することを試みる。同事業は、1956（昭和31）年4月から長野県下で始動し、その後、地域偏重を見せつつも、徐々に県内外各地へと拡張していき、老人家庭奉仕員派遣事業の国庫補助事業化（1962年4月）や老人福祉法成立（1963年7月）などへとつながった。家庭養護婦派遣事業、原崎秀司、関澤欣三、竹内吉正などを中心とした同県下のホームヘルプ事業史については、少しずつ研究が蓄積され始めているものの、キーパーソンの一人である竹内の背後にあった育ち、環境、思考、体験についてはその重要性にもかかわらず、宮坂（1993）の記録物以外にほとんど研究がなされていない。

そこで、本稿では、主に『以和為貴——花里家の記録』、『信濃教育』（497）・（506）を基礎資料とし、竹内が幼少期から成人期に至るまでのような生活を送り、ホームヘルプ事業の推進につながる思想的影響を、父、吉次郎をはじめ、身近な人達からいかにして受けていたのかを明らかにすることを目的とする。一方、倫理的配慮としては、竹内及び吉次郎関連史料については竹内の実兄の花里吉見氏（1919-2011、以下、花里）から2009（平成21）年10月3日に使用許可及び研究の範囲内での公表の許可を得た。また、筆者の所属校の研究倫理審査委員会の承認を得た（中京研倫第2019-007号、2019年7月17日承認）。

以下、Ⅱ章では父母の生い立ち、生き方など、竹内の生育的背景に具体的に迫り、Ⅲ章では竹内に対し、父を中心に家族が与えた影響を探索すべく、彼の回顧並びに吉次郎の聖徳太子研究の内実を掘り下げ、Ⅳ章では竹内が生育的環境からいかなる影響を受けていたのかを論考しつつ、全体の考察と今後の課題を述べる。

## Ⅱ. ホームヘルプ事業推進者、竹内吉正の生育的背景

### 1. 父母の生い立ちと教育的環境

既述の通り、筆者は竹内の生育的背景にアプローチし、彼のホームヘルプ事業化推進の背後にあった出来事や実体験を浮き彫りにする必要から、『以和為貴——花里家の記録』を紐解いた。その際、亡き父後の家長として奮闘し、多面的かつ多角的に回顧録を執筆した長兄、花里の記述はとりわけ注目される<sup>1)</sup>。さらに、そもそも彼らの故郷である“絲の都”と称される信州地方の北佐久郡岩尾村にクローズアップすると、『旧高田領取調帳 関東編』(1969-1979年, 近藤出版社)によれば、同地は元々、旗本領であったとされ、その歴史的変遷として、清和源氏小笠原氏流大井氏の一族である長土呂大井氏の大井行俊が1478(文明10)年に築城した岩尾城が象徴となり、同城は後に甲斐の武田晴信(のちの信玄)に攻略され、当時の城主は城を捨て逃れたものの、その後武田側に臣従して岩尾城に戻ったという経緯がある。なお、1545(天文14)年に岩尾城代に任命されたのが真田幸村の祖父、幸隆であり、その子の昌輝、昌幸は岩尾城で誕生したという言い伝えさえも残される。

こうした歴史的な地で、竹内の父、吉次郎は1886(明治19)年1月17日、6人兄妹の二男として誕生する。父方は農業の傍ら薬種業を営み、中級の中位の農家であったという。その後、早稲田大学文学部英語学科を卒業した吉次郎だが、花里はその当時を回顧し、「百姓のせがれが当時東京の大学に入ることは破格のことで、学問好きの祖父藤吉と父の指向が合致したのだろう。だが経済基盤の弱い農家のこと、父はいわば苦学生だったと思う。…(中略)…両親は苦勞したろうし、父は田畑に入らなかったから兄妹にもその皺寄せがあった」などと(花里 1993:22)、その苦難を推し量っている<sup>2)</sup>。

一方、竹内の実母、きのいは、上田市海野町の繭問屋長峰佐十郎、みきの三女で、1894(明治27)年12月10日に誕生し、学生時代は共立女子大学の鳩山春子女史に傾倒し、同大学手芸科を卒業している。その後、初

任地、四国高松高女へ赴任したのは20歳の春であり、一人息子の末弟が早世したため、きのいの姉二人は商家の跡継ぎ修行が課せられたと伝えられる（花里 1993:22-3）。きのいの父、佐十郎は人格温厚で、業界の信望もあった半面、商いには向かない人柄だったとされ、算盤に長けていた祖母みきが家業の前面にたたさされていたという（同）。加えて、こうした母方においても「二人の娘（きのいとその妹）を大学に送るには、天職を持ってたたかに生かしたいと願う親の姿勢があったと思う」などと花里（1993:22-3）は推察し、これらから、竹内の両親はともに苦境のなかでも学問や勉学を疎かにしないという教育的環境下で育てていたと言えよう。

## 2. 父、吉次郎の生き方と聖徳太子奉讃會法要

吉次郎が3歳であった1889（明治22）年2月、大日本帝国憲法の発布により、黒田清隆内閣の超然主義政策が展開され、同法の範囲内で、居住・移転・信教の自由、言論・出版・集会・結社の自由、信書の秘密、私有財産の保護などが認められ、人々の暮らしにも変化の兆しが見られ始めていた。早大卒業後の吉次郎は、師、佐藤寅太郎（号は長州・初代信濃教育会長）の導きで小諸商業学校に奉職し<sup>3)</sup>、そこで、菊地亮三郎（以下、菊地）との運命的な出会いを果たす<sup>4)</sup>。

それは、教師の仕事に熱心だった吉次郎の宗教観に寄与したのが菊地であったことにも起因し、この他にも、祖母ていの信仰が大きく関わっていたとされる。因みに、ていは祈りがクライマックスに到ると、霊媒の世界に入れたほどであったという<sup>5)</sup>。さらに、その後、崇敬していた三吉の小県蚕業学校に転勤した吉次郎は、不幸にも、修学旅行の引率から帰ってきながら腸チフスを発症してしまう。その際、当時、上田公園内にあった避病院で吉次郎は生死の境を彷徨うものの、小根沢義山師が駆けつけて法華経で快癒を祈願し、加えて、ていによる日蓮宗信仰に基づく朝夕のお勤めにより、漸く奇跡的に一命を取り留めている（花里 1993:23-4）<sup>6)</sup>。

名古屋松坂屋本店教育部長を歴任していた菊地は、こうした吉次郎に対

し、これを機に大阪松坂屋の教育部長への就任を強く要望し<sup>7)</sup>、思案の挙句、吉次郎たち一家は信州を去る一大決心をする<sup>8)</sup>。第一次上海事変勃発、満州国建国、五・一五事件、東京市誕生などが見られた1932(昭和7)年当時、世の中には徐々に軍国調の波が広がり、「法令によって松坂屋にも青年訓練所が生まれ、父の責任も重くなってきていた」と花里(1993:24-5)が言及する如く<sup>9)</sup>、戦地に赴く若者たちの教育係に吉次郎は精を出していた。その一方、「昭和十年四月、太子奉賛会名誉総裁久邇宮朝融王殿下をお迎えし、法隆寺で五十年に一回という太子の大法要が行われ」ており(花里 1993:25)、吉次郎はこれに勇んで参加している<sup>10)</sup>。その理由として、聖徳太子が制定した十七条の憲法の第一条「和を以て貴しと為し忤ふこと無きを宗と為す……」(以和為貴)こそが花里家の家訓とされるほど、彼は聖徳太子研究に没頭していたことが挙げられ、それはライフワークの一つと言える程であった。ここで、花里家の人々に少なからぬ影響を与え、方向づけもしたであろう彼の聖徳太子研究の詳細に以下、アプローチする。

### 3. 父、吉次郎による聖徳太子研究と「八大眼目」

吉次郎の聖徳太子研究については多くの史資料が残存しているわけではないが、共産党大弾圧や治安維持法が猛威を振るったとされる1928(昭和3)年に執筆された論稿が代表作であろう<sup>11)</sup>。具体的には、『信濃教育』(497)に収められている「聖徳太子褒貶論由来の研究」(花里 1928: 頁数不詳)と『信濃教育』(506)に掲載されている「聖徳太子褒貶論由来の研究(その四)」(花里 1928b:22-32)の2本であり、とりわけ前者では、「太子薨去の年は推古天皇三十年壬年、紀元一千二百八十二年、今昭和二年に先だつこと正に一千三百六年である。此の間に於ける太子に對する褒貶論の變遷を大別して次の四期となす」と論じられ(花里 1928a: 頁数不詳)、4つの時期に区分して論考されている(花里 1928a: 頁数不詳)<sup>12)</sup>。なかでも吉次郎が着目した第4期の序説は次の通りである。

第四期 太子奉讃の時代（大正十年以降） 大正十年聖徳太子御忌の正當日なる四月十一日、畏くも邦彦王殿下には聖徳太子一千三百年御忌奉讃會総裁として、大和法隆寺、河内叡福寺に於て嚴修せられたる太子御遠忌大法要の恩儀に臨ませられ、時の奉讃會長徳川頼倫侯以下朝野の名士は此の盛儀に参列して仰いで太子の御偉徳御鴻業を拝しまつり、次で恩賜基金五万圓、通常基金三十五万圓を以て、財團法人聖徳太子奉讃會は組織せられ、久邇宮殿下を総裁に仰ぎまつり、徳川頼倫侯を會長に、澁澤子爵を副會長に、伊東工學博士、林醫學博士、高楠文學博士、高島米峰、黑板文學博士、山本直良、松井法學博士、正木直彦、藤岡文學博士、江崎政忠を理事に團工學博士、桐島像一を監事に、山岡超舟を主事に挙げ、……（花里 1928a: 頁数不詳）

上の引用に見られる組織構成から名士や学者などの参画による財團法人のとり組みの一端が窺え、同法人聖徳太子奉讃會では、「聖徳太子の偉徳鴻業を奉讃開明する目的」を以て、以下の「八大眼目」を立てて實際運動の展開が志向されたように、実践を重視した視点を汲み取れ、その典型は太子奉讃展が花々しく帝都に顕われたことに伺えた<sup>13)</sup>。

- (一) 講演會を開き又は宣傳文書を發行配布すること
- (二) 遺蹟を保護し且つ法隆寺勸學院の維持發展を図ること
- (三) 五十年毎に奉行せらるる聖震大會を奉賛すること
- (四) 法隆寺に於て五ヶ年毎に執行せらるる御忌法用を奉賛すること
- (五) 記念展覽會を開催すること
- (六) 特殊の事項を研究調査せしめ表彰及懸賞の方法に依り學藝を奨励し又は著作編纂物を出版すること
- (七) 施策を行ふこと
- (八) 其の他聖徳太子に関係せる事業（花里 1928a: 頁数不詳、傍点筆者）

言うは易く行は難しだが、上記傍点部に吉次郎の力点の一つが窺い知れ、帝都における奉讃展の終了を見届けた彼は、「空前の大成功を収め得たもので従来我が美術界は各派分立して、能く一堂の下に千紫萬紅の妍を集め得なかつた甚大なる憾は、太子を中心としての此の奉讃展の出現に據って、名残りなく洗ひ去られ、所謂、帝展院展、二科會、春陽會、國書創作協會、自由書壇等、本邦藝苑の精英を恰く網羅して是れを一堂に集め、以て百華妍を競うの盛觀を呈せしめ、眞に全日本綜合美術大展覽會を如實に、公衆の眼前に示し得たのは全く空前の大成功と云はねばならぬ」と述べ (花里 1928a: 頁数不詳)、吉次郎はこれを機に、美術界のさらなる發展を祈念しようとする<sup>14)</sup>。

なお、第4期の補足説明として、「奉讃會今後の實際運動としては前掲事業の遂行の外、全国各地に於ける太子講の復興に力を致して、それと連絡を保ち、諸種の工人教化に任じ、進んでは一般労働者の化導の為、各工場を説きて太子の尊像を奉安して、尊祖敬虔の情操を涵養し、労資協同の上に立っては、思想改善の實を挙げしめ、一方日曜學校等と提携して、太子の御精神を實現せしむ可き計画を有すると聴く。此の外我が五大國聖として奉讃する天業青年團の如き、力強き聖業の團體があるが、然し一方深く觀察する時は現今暫く鳴りを静めて、おとなしくしては居るが、而も猶ほ依然として太子非難の聲は上下を通じて絶無では決して無い。是れが現在、昭和聖代の實況である。以上を以て第四期とす」などと論じられ (花里 1928a: 頁数不詳)、ここから、吉次郎は昭和期における聖徳太子評のあれこれを熟思しつつも、そうした風評に一喜一憂することなく、個々人が今、何をすべきかを考えることが重要であり、「労資協同」や「思想改善」など、個々人の奮闘や辛勞を怠ってはならないと自戒しようとする<sup>15)</sup>。

#### 4. 讚美歌を通じて伝えられた母、きのいの生き方

こうした吉次郎の思想的基盤にあったものの一つに、師、三吉からの指導・助言が挙げられ、一方、母きのいも幼少時代、カナダの宣教師から教

えられた経験が根底にあった。竹内は、幼少期を振り返り、「母きのえが、私たち幼児期にあった多くの兄妹達を寝付かせるとき、歌ってくれたのは、きまって讚美歌だった。そして“梅花”という言葉をよく耳にした」などと語り（竹内 1993:32）<sup>16)</sup>、花里（1993:25-6）も、讚美歌の影響で音楽が好きだったきのえが、4歳の花里を劇場に連れて行き、中山晋平、野口雨情コンビによる近代童謡の「てるてる坊主」と「帰り道」の発表会を聞いた経験を鮮明に覚えている。なお、NHKのラジオ歌謡が盛んであった当時、「椰子の実」「Aの字の歌」を好んだきのえの十八番は「浜千鳥」であった（花里 1993:25-6）。

他方、さらなる具体的体験を吐露した花里（1993:26）は、「父が子供を引き連れ、ピクニックに出る日曜日は、母は早暁から玉子焼き、れんこんの油いため、三十個を下らないむすびを用意し、五、六本の水筒に番茶をいれてくれる。楽しいあやめ池にも、奈良公園にも母の姿はなかった」などと記述し、子育てに追われる日々であった母の労苦を想起する。このことは、きのえの生き方そのものと言っても過言ではなく、「子供が多くて、いつも乳飲み子が絶えなかったわが家は、ついに父が憧れてやまなかった大和路に母を伴うことはなかったように思う。母は外出する父の頭髪のポマードつけから靴みがきまで一人でやった。思えば高松、長野、上田と高等女学校教師のあとは、子育てに専念し、乳離れしていなかった篤子を残して世を去るまで、楽しいゆとりの時間などなく、子のため一生を終えた人だった」からも裏付けられよう（花里 1993:26）。

### Ⅲ. 家庭環境が竹内吉正に与えた影響

#### 1. 竹内吉正による回顧——父親の里、佐久の家のことども

上記の如く、昭和初期の昭和恐慌を背景として、1932年（昭和7年）頃から始まった新日本建設運動下においてすら、多忙な日常ながらも花里家では聖徳太子研究への着手やピクニック、さらには家族団欒が見られるほど恵まれた暮らしぶりであったことが窺える<sup>17)</sup>。但し、こうした優雅



な生活の将来像を竹内自身がどのように描写していたのかまでは判然としないが、少年期の竹内にとって忘れることができない思い出があったという。それは以下の如く、長期休暇の折に行っていた本籍地北佐久郡岩尾への一人旅であり、小学生だった竹内にとっては大冒険であり、故郷を愛でる契機となる出来事でもあった。

私が小学校四、五年生になった時から、夏休み、冬休みになると、父は必ずといっていい程、本籍地佐久、岩尾の故郷に帰省させた。そこには父の両親藤吉夫妻がいた。不自由な高齢の日々の生活が心配だったのであろう。母は私が休みになると長旅して出掛けるのが『かわいそう』と、私を避けて、父とよく口論していたのをいまも覚えている。たしかに私も切ない思いもあったが、父の命ずるままに素直に従った。しかし大阪梅田駅に出て東海道線を選ぶのではなく、母が安心するように、舎宅のすぐ近くを通る関西本線を利用するようにしていた。名古屋からは中央本線、篠の井線、信越本線を経由して、精いっぱい緊張で小諸着。乗合バスで岩尾に下車、蚕飼いの臭いに浸ると、もう佐久の生活に入れた(竹内 1993:30)<sup>18)</sup>。

上記から、子を思う親心や母親を心配させまいとする竹内なりの気配りが看取でき、続けて、竹内は「私が寝るのはきまって、おじいさんとおばあさんの間に挟まっていたのを、今もみずみずしく思いだす。『マサはあつたけえ』と口癖のように言っていた。川の流れにある洗い場で、おばあさんと食後の洗い物をして、鍋、釜、食器と幾度か運び、おばあさんは杖だけで帰ってくるようにしたり、井戸の水汲みは欠かさず甕いっぱいにしておいたり、敷居の雑巾かけには、釘に充分注意したり、そんな長期休暇で老人との生活体験は、老人福祉の事業に苦闘する私には、大きな賜物となっている」などと回想し(竹内 1993:31、傍点筆者)、この一文にこそ、のちに竹内が社会福祉分野に参入することになる源流の一つの手がかりを

見出せる。なお、こうした試練を課した吉次郎は竹内に対し、事々に「吉正は吉正なりに」、「お前は平凡に生きよ」などと諭したとされ（竹内 1993:31）、この言葉は、竹内自身の内奥に深く印象づけ続けることになる<sup>19)</sup>。

## 2. 父、吉次郎の闘病生活と遺言に表れた“以和為貴”

このように、実際の生活体験から学ぶことを重視していた花里家においては、平穏な生活は長続きせず、近衛文麿内閣の発足以降、盧溝橋事件、日中戦争、南京大量虐殺などが発生した 1937（昭和 12）年はまさに激動と年となる。とりわけ、吉次郎においても予断を許されず、彼の闘病生活にその苦境が顕在し、以下からもその危機感を窺い知れよう。

昭和十二年六月下旬、大阪赤十字病院、阪大病院で検診の結果、胃がんで、しかも部位が悪くてもう手術はできないと、母から内密に聞かされ、「しっかりしなけりゃいけないよ」と言われた時は、目の前が真っ黒になった。道修町（薬品店街）からドイツ製の薬を、薬をも掴む心地で求めた母のしょげぶりは眼から消えない。それでも父は不調の身をふるい起こし、「吉見、法隆寺へ行って管長さんに会い、本尊に願をかけてきてくれや」と言われた頃は、容易でない病と悟ってのことだったろう。痛み止めの注射をやっても、天井を向いて目をつぶり、激痛に耐える顔に、「変な顔になって、見ていてもいやだろう」と言う。「もし床の間に日本刀でも飾ってあれば、自分で腹を切りたい」とも言った。（花里 1993:26-7、鍵括弧内ママ）<sup>20)</sup>

上記の「しっかりしなけりゃいけないよ」や法隆寺への願掛けを託されたことから、両親による長兄、花里への鼓舞が看取でき、その一方、「日本刀でも飾ってあれば、自分で腹を切りたい」という吉次郎の言葉に、堪え難い痛みに加え、彼の無念さや悲痛な思いが窺える。苦闘中の

吉次郎は、自身の死の6日前の1937(昭和12)年9月22日、二人の息子(花里、竹内)を枕辺に呼び、最後の力を振り絞り、約20分間、説論を行っている。それは以下のように想起され、ここに花里家の家訓の意を垣間見れる。

吉見、吉正。今から言うことをよくきけよ。父さんは人様に恵まれ、お蔭で大きな間違いもなくここまで来たが、もう立てるかどうかわからん。お前たち二人には言うておきたい。いいか、どんなに苦しいことに<sup>出</sup><sup>会</sup><sup>っ</sup><sup>て</sup>も<sup>逃</sup><sup>げ</sup><sup>出</sup><sup>す</sup><sup>な</sup>。大勢の<sup>兄</sup><sup>妹</sup><sup>だ</sup>。仲<sup>良</sup><sup>く</sup>暮<sup>ら</sup><sup>す</sup><sup>ん</sup><sup>だ</sup><sup>ぞ</sup>。力<sup>を</sup><sup>出</sup><sup>し</sup><sup>合</sup><sup>っ</sup><sup>て</sup><sup>な</sup>。母<sup>さん</sup><sup>を</sup><sup>助</sup><sup>け</sup><sup>て</sup><sup>や</sup><sup>っ</sup><sup>て</sup><sup>く</sup><sup>れ</sup>。……吉見はみんなをみる責任がある。花里の家は信仰で支えてきた。聖徳太子への信心も父さん一人のものではなくて、世の中が立派になるための信仰だぞ。これからも父さんの生きてきたことをよく考えるんだぞ。いいか。妹たちの面倒を見てくれよ。(ここで目を閉じ、かゝるから篤子までを一人ひとりの名前を呼んでいた。)こうなっても仏のお守りがあるから、心配は要らんど。やりのこしたことはいっぱいあって…(絶句)…。いいなあ、兄妹仲良く、母さんを中心に元気よくやって行けよ。分かったか。分かったな……。 (花里 1993:27-8, 丸括弧内ママ, 傍点筆者)<sup>21)</sup>。

### 3. 母、きのいの中耳炎手術と死

1937(昭和12)年9月28日、父、吉次郎を胃がんで亡くした花里家の家庭環境はその後、激変を余儀なくされ、「父の親友菊地亮三郎氏を頼って(大阪から)名古屋に転居(吉見、吉正は旧制中学在学中のため残留)」することになった(竹内 1993:32-3, 丸括弧内筆者)。他方、さらに苦境は続き、きのいまでもが「肋膜を患い、回復しないまま、西村耳鼻咽喉科病院に、中耳炎の手術で入院」してしまう(花里 1993:29)<sup>22)</sup>。これは彼女が「亡くなる三日前のことだった」ことから(同)、きのい自身も日頃からの相当の無理が祟っていたと言えよう。死の間際において、きのいの

思いや生き方を如実に窺い知れるエピソードが残されている。以下の記述から、彼女がいかに子どもを思い、家族を大切にしようとしていたかが解読できる。

もう戦時下で、市民生活もすべて配給制。それでも母の大好物のえびの天井を何とか手に入れようと、かをるがやっとの思いで特大のえびを探し当て、母にすすめる。高熱の影響で、半ば幻想的な言葉も口にしていたが、「かをる、はる枝、ほう、てる代も梅子もおいで。早くあったかい中に食べなさい。こんなえびは食べられないよ。おいしい!」。死の床でも、心は子を離れることとてなかったようだ。母の嬉しさと、余命を悟ったかをると私は、目でうなずきながら哀れな母を見つめた。昭和十六年十月二十五日、午後二時十八分、父を亡くして四年で母も旅立ってしまった（花里 1993:29）<sup>23)</sup>。

#### 4. 兄妹8人による苦難と試練

かくして、立て続けて多くの犠牲を出していた家庭内では、両親不在の状況のなか、兄妹たちのみでの苦しい生活を余儀なくされることになる。とりわけ、当時、花里一家を苦しめた最大の問題は食料不足であり、「戦後、食糧難の折、兄妹八人の困窮生活を整えるのは専ら長女かをるが担当。正に母親的役割で物々交換して食料を集めてきた」などと（竹内 1993:33）、兄妹たちが一丸となって助け合いの生活を送っていた<sup>24)</sup>。その一方、大黒柱となる二人の兄（花里、竹内）は、「当時、兄（花里）はりんごの行商に信州と中京地区を往復し、私は出征前の三菱重工業菱和機器に復職し、構造設計を担当」などと（竹内 1993:33-4、丸括弧内筆者）、懸命に働きながら家族を支えようとしていた。さらに、玉音放送で終戦を知った一家では、その翌年の晩夏に竹内が復員してくるのだが、「体格の良かった兄（竹内）が別人のように痩せて帰って来た。生死不明だったので、私たちみんな本当に喜び嬉しかった」と林（1993:47）は述懐し、その後、竹

内はゆっくりと休むことなく三菱に復職する。竹内自身、「私が復職した三菱重工業(名古屋)は、当時平和産業として、バス車体や家具一般を生産。この環境の中で、精神的過度の緊張、過重な労働、そして戦地での栄養失調症の再発で、私は帰省、療養の身となった」などと論じ(竹内1993:33-4)、戦中から戦後にかけても、その道のりが平坦ではなく、と同時に、各人が十分に力を発揮し続けていたとは言い難く、兄妹8人の苦闘は続いた。

このような文脈の下、花里家では一銭もない日が続くこともざらではなく、まさしく、極貧生活と言っても過言ではない苦しい日常生活体験を送っていた。ここから、「以和為貴」の標榜なくしては実生活がままならないほどの苦境を各人が経験しており、こうした苦難や過去の壮絶体験が、その後に生かされるまでには今しばらく時間を要することになる<sup>25)</sup>。

#### IV. おわりに

本稿では、史資料的な限界が見られるなか、竹内の実父、花里吉次郎が死去する1937(昭和12)年前後の花里家の人々の暮らしや思考を、回顧録や論稿を基に論じてきた。“絲の都”とされる当時の長野県上田市には、豊かな自然や伸びやかな環境がある半面、厳しい生活の現実や多子家庭・一人親家庭といった容易ならぬ家庭環境も少なくなく、とりわけ、戦前であっても軍国調の余波が押し寄せつつあった1937(昭和12)年の段階においては、盧溝橋事件や日中戦争など、偶発的要因や社会情勢の影響が見られ、加えて、父、吉次郎の死が花里家の生活実態や家計経済に大打撃をもたらしていた。

さらに亡き父に続き、母までもが昇天したことが致命傷となり、一銭もない日を送ることもあった花里一家にとって、壮絶な極貧生活を送らねばならず、その一方、兄妹8人のみの苦しい生活を通じ、二人の兄をはじめ、上原を中心とした兄妹の助け合いや結束が強まる方向に作用していたことも紛れもない事実であった。加えて、聖徳太子に傾倒した父が遺した家訓

が「和を以って貴しと為し忤ふこと無きを宗と為す……」(以和為貴)であったことも、このような波乱に満ちた生活を兄妹たちの“和”をもって乗り越えられた遠因の一つになっていたと考え得る。こうしたなかで、兄妹たちは徐々に自立の方向を見定め、ことに竹内においては、復員ののち約5年間の闘病を経て、受洗、復職という形で、1955(昭和30)年7月に上田市社会福祉協議会初代事務局長として社会福祉分野への参入を果たし、ホームヘルプ事業化を強力に推進していくことになるのである。これら一連の検討は、ホームヘルパーに関し、Kさんモデル説をとり上げた上村(1997:247-57)、山田(2005:178-98)、荏原(2008:1-11)などには見られなかったものであり、塩入(1992)、上田新参町教会(1992)などの宗教的変遷をとり上げた年史類からも辿り着くことができない論点であった。

なお、竹内は、はる枝を除く妹3人と同じく、上田聖ミカエル及諸天使教会(日本聖公会)で1953(昭和28)年12月24日に洗礼を受け、後日、「わが教会史は、ある見方では、平凡な内容であるかも知れない。しかし、その平凡な過程のなかに生まれ出る営みと神の祝福は、限りなく、そしてあまりにも豊かである。それなるが故に確信をもって、共に、ともに勇み行きたい」などと述べる如く(竹内1989a:まえがき)、信仰の人としても生きた<sup>26)</sup>。また、同教会と上田明照会創設者である横内浄音(浄土宗呈蓮寺第27代住職)とが関連していたことも史資料から窺い知れ<sup>27)</sup>、ここにもさらなる研究の余地が残される。

おしなべて、地方の社会福祉史の研究では、時として新たに発掘された諸事実を網羅的に並べ、それが全体の構造や構想のなかでどのように位置づけられ、いかなる意味をもつのかという点の言及が十分でないものが少なくない。歴史研究では、ミクロ、メゾ、マクロの各々の視点から多角的に捉え直し、実証的に浮き彫りにしていく作業を怠ってはならない<sup>28)</sup>。

**付記** 本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金:基盤研究(C)

19K02172, 研究代表者 中嶋 洋)の研究成果の一部である。

## 注

- 1) 竹内の2歳上の実兄、花里の没年の2011(平成23)年1月、「花里吉見先生遺作展」が上田市天神の上田ガス本社内、GASギャラリーで開催された。なお同氏については、「1919年上田市生まれ、三菱重工業航空機製作所技師、上田市社会福祉協議会事務局長を歴任。1965(昭和40)年からラグビー、1977(昭和52)年からシルクロードの写真取材を行い、国内外の写真コンテストで多数受賞された」などと紹介される。
- 2) 花里(1993:22)は、地元における父、吉次郎の評判についても言及し、「弟、妹の面倒をよくみた父は、部落ではやさしい、できた子だったと祖母が言っていた。父は末弟富雄が中学の卒業も待たず早世したことをよく嘆いていた」と述べ、その一方、祖父母についても「藤吉は無類の歴史好きの老人で、私は中学生の頃よく祖父と議論したことがある。祖母のていは信仰心の強い、明晰な頭の女性だった」などと回顧している(花里 1993:22)。
- 3) 吉次郎が師と仰ぐ佐藤の代表作には、佐藤(1893:258-64)があり、白田(2004:170-91)によってもとり上げられている。
- 4) その一方、花里は「『仏教徒になる位なら豚に蹴られた方がよい』と、日本仏教外史の著者でもあった菊地先生に、若き日の父が勇ましい言葉をはいたと、父の死後聞かされた」と回想しており(花里 1993:23)、若き吉次郎の姿を彷彿とさせる。他方、吉次郎は、「八人の子供の中、六人は仏教に深い縁のある方に、命名を依頼し、吉見、かをる、はる枝、梅子は菊地先生、吉正は海軍大将加藤定吉、てる代は本陽寺住職小根沢義山、和子は法隆寺管長佐伯良謙、篤子だけは父だった」と明かされるように(同)、仏心を大切にしていた。なお、命名に関し、「聖徳太子十七条憲法から和子同様につけたいがと、私に相談的に意見を求められた。この時、一家の長男として父に認められつつあることを実感した。命名は当然母と協議してのことだが、父の生きざまを表徴していると思う」と述べた花里(1993:23)は、個々の名前の由来からも故人の生き様を想起しようとする。
- 5) 祖母ていの靈感に関し、「このことは週刊上田のもう一人の祖母に掲載」された

と記されるが(花里 1993:23)、詳細は不明である。

- 6) なお、この頃、「昭和三年、我が国実業教育の先達と言われ、師と仰いできた三吉校長先生が亡くなった。父は教学上の指向とか、使命感のようなものまで、ぐらつく程のショックがあったのではなからうか」などと花里(1993:24)は、師との別れを経験した父の内面を探っている。
- 7) 「岩村田の佐藤長州先生にも相談したと思う」などからも(花里 1993:24)、吉次郎の苦悩ぶりが窺い知れよう。
- 8) また、吉次郎の選択理由として、花里(1993:24)は、「これは私の想像だが、舎宅のある天王寺町は、聖徳太子の四天王寺の鐘が聞こえる限界であり、大和路に展開する仏教寺院、遺跡への大きな憧れが心を動かしたに相違ない。太子研究が佳境に入り、法隆寺、薬師寺、唐招提寺、橘寺、廟のある上の太子……と、それぞれ管長、住持さんとすぐ昵懇を得て、宗教上の問題点、太子研究の報告と話題は豊かで、指針も頂いたのだろう」などと推察し、加えて、「黒板勝美先生から、民間の学位も爵位もない者としては異例の聖徳太子奉賛会員に推挙された。家のなかでは、父の専用の花里原稿用紙がいつも眼についたし、この頃はもうライフワークとして太子研究を位置づけていた」からも(花里 1993:24)、彼の熱中ぶりが認識できる。
- 9) 「父は少年期に日清、日露戦争の影響を受け、軍人指向で海軍兵学校を目指したが、近視という決定的なダメージで、果たせなかった夢を、多くの陸海軍将校と交遊があった。海軍軍令部長、大将谷口尚真、海軍大将加藤定吉、陸軍大将大迫尚道、航空母艦赤城艦長和田秀穂大佐、松本第五十連隊長岡原寛大佐……」などという記述からも(花里 1993:24-5)、吉次郎の軍隊に対する熱情を看取できる。
- 10) 花里(1993:25)は、「その折、奉賛会長細川護立侯爵と間違えられて、真紅の大傘を差しかけられて、それでも動ぜず、静々と歩いていたという。茶目気と言うべきか、肝が太いのか。やはり血液型はO型だった。父は音痴を自認していたのか、とにかく大声で歌えばいいと、乃木大将、広瀬中佐、黄海々戦、桜井の駅の別れ、ほづつの響き……となると、声はかすれ、きまって母が受けて、



いつしか讚美歌になっている。こんな両親を見るのも長女かをるが生まれる頃までだったろう」などというエピソードも明かしている。

- <sup>11)</sup> 森田 (2002:48) の論ずる「『日本書紀』十七条憲法は、皇太子親肇作憲法十七条、という文言で始まっているのであるが、私見によれば皇太子制が始まるのは天智期であり、推古期の頃皇太子が置かれていたとは解し難い。しかしこの皇太子も厩戸皇子が作ったとあった原資料を『日本書紀』の撰者が皇太子親肇作と解釈し直したとみれば、全くの捏造とみる必要はなくなる」から、史実の検証が不十分な点も見受けられるが、本稿では、その条文第一条「和を以て貴しと為し忤ふこと無きを宗と為す……」(以和為貴) が花里家にどのような影響を与えていたのかにアプローチした。
- <sup>12)</sup> 具体的には「第一期 聖者として仰ぎし時代 凡 一千年間、第二期 倭佛者としての貶せし時代 凡 二百五十年間、第三期 褒貶兩論對立の時代 凡 五十年間、第四期 太子奉讚の時代 大正十年四月以降」と区分される。その一方、「以上は極めて大體別であって之れを詳かに観る時は、第一期の時代に貶斥論あり、第二期の時代に、褒揚論がある」と述べ (花里 1928a: 頁数不詳)、さらなる研鑽を希求しようとする。
- <sup>13)</sup> 「大正十五年は青葉の薫る五月の初旬、帝都は上野の高臺に、太子奉讚展は、いとも雄々しい産聲を挙げたのであった。恰も此の年は聖徳太子一千三百五年の御忌に相當し、且つ多年美術家の渴望して止まなかつた、東京府美術館の新築が、正に成るといふので、これを機として全日本的綜合美術展覽會を開き、總會、彫刻、工藝の各流派を網羅し、以て聖徳太子が本邦藝術の御祖にまします所以を、遍く我が國民の記憶から呼び起したいと云ふ趣旨の下に、此の會は開催されたのであった」からも (花里 1928a: 頁数不詳)、同会を吉次郎がいかに位置づけようとしていたのかが分かる。
- <sup>14)</sup> 「總裁 久邇宮殿下は、開會の前日に親しく御自ら御下見あらせられ、開會に際しては、東宮攝政殿下の臨御を仰ぎ、次で各宮殿下の臺覽あらせらるる等、正に明治創業の後を受けたる守成、大正の大御代の晩年を飾る、最も光榮ある一大モーニメント (ママ) であった。而して是れを第一回として今後五年毎に、

聖徳太子奉讃美術展覧會は開催さるる筈で、如斯して偉大なる上宮聖徳太子の御聖發を慰め奉り、由って以て我國美術界の振興に貢献裨補するのである」とする記述も（花里 1928a: 頁数不詳）、その証左の一つであろう。

- <sup>15)</sup> 一方、吉次郎は、原典に当たる意義を看取しており、そのことは次の長文からも汲み取れる。「是れ『大日本史卷之八十七、列傳第十四、用明六子』と云ふ項に見ゆる『聖徳太子廢戸』なる文中より摘記せるもの、大日本史記載の『太子聞而哭日、過去報也』の十字は、本文に因って正しく『太子傳曆』中より其の史料を得たること明かなり。大日本史が他の数多き史籍中、其最も異なる點は、そが所依の原本の名を明記せし所にあり。これが為後進者は、其の原典に依りて、研究するの便を得、大日本史編纂委員の辿りし跡を究め、更に學ぶ所あるを得。是れ後學者が、修史委員に最も感謝する所で、亦水戸義公を始め史官等の甚深の注意を佛はれた、一要件なりしと考察するものである。後年の吾等が、往年の水戸修史委員が抱いて居った聖徳太子觀の成因たる、原典を窺ひ知ることを得るは、一重に是れ在るが為めである。『聖徳太子傳曆』本の史的価値は、漸く近年の研究に因って、始めて明確に、成されたもので、大日本史編纂當時に於ける修史委員にとりては、唯一の最も貴重なる史料であつたに相違ない。斯るが故に別段の考慮も佛はず、直に採って以て正史に載せたものである。當時に於て斯くする事が或は無理ならぬことであらう。然しながら余は、佛事志卷に筆を執った編纂委員の意中を汲み、之が了解に苦しむものである事を、茲に記し置き、餘事は評論に入って陳述するであらう」（花里 1928b:32）。
- <sup>16)</sup> なお、梅花幼稚園については「一九〇〇年（明治三十三年）木町に幼稚園が開設され、翌年園長ミス・クロンビーが就任、翌々年十一月丸堀に園舎を新築移転し、“梅花幼稚園”と命名、園長イザベラ・ハーグレーブが着任するが、教会礼拝は恐らく幼稚園施設の兼用だったことを思えば、母は娘時代の口ずさみを、そのまま子守歌にしていたのであろう。これらの婦人宣教師は、すべてカナダ・ミッションからの派遣であつた」と説明される（竹内 1993:32）。
- <sup>17)</sup> 後年、竹内自身も、「私たち兄妹が大阪の百貨店松坂屋舎宅に優雅な生活をしている頃、……」などと言及し（竹内 1993:30）、さらに、長女の上原（1993:41）は、

「松坂屋の舎宅 (男店員だけの寄宿舎)、大きな敷地、何万坪だったのでしょか。その中に我が家があり、テニスコート、弓道場、相撲場、鉄棒があり、我が物顔で使わせて貰っていましたが、定休日になると、本社の方からも人がみえて練習をしていました。老舗の店にあるようにお稲荷さんが祭ってあり、池に鯉が沢山泳いでいました……」などと、その優雅さを説明している。

- <sup>18)</sup> 加えて、「二人の老人は、私の姿をみると殊の外喜んだ。その夕食は必ず“おほとう”を馳走してくれた。おばあさん独特の息を弾ませて『マサや』『マサや』と、話しかけながら手作りしてくれた。炬燵のおじいさんは、淋しいのか時折に『マサ』と、でっかい声を張り上げた。そして肩を揉み、静かに叩くと話は限り無く、うちわの裏に書いていた狂歌『人生わずか五十年。泣いて暮らすも笑うて暮らすも心ひとつの置き所、風に柳は争わず、思えばこの世に敵はなし』と、幾度か聞いた」などと竹内 (1993:30-1) は述懐している。
- <sup>19)</sup> 一方、後年の竹内は「しかし『平凡』ということの難しさも日々味わう昨今である」とも述べ (竹内 1993:31)、父から受けた言葉の重みを実感している。
- <sup>20)</sup> さらに詳細な記憶を手繰り寄せた花里は、「常に枕辺にはお経の本があり、時々現実ともうわごとともとれない口調で、きれいな庭園でお釈迦様と話せたとか、宮殿の欄干に凭れていると、おごそかな鐘の音に小鳥が乱舞した。ありがたいことだなどと言う父に、菊地先生は禪定に入ったと言われた。八月三十一日、夏休みの最後の日、天王寺駅から法隆寺まで心で経を唱え、もし寿命があるなら、どうか父の生命を救い給えと仏前に跪き、切願した。帰りの境内の玉石の音と松の緑が悲しかった」などと記している (花里 1993:27)。
- <sup>21)</sup> 父、吉次郎の説論に対し、「ハイ」の返事とともに大きくうなずいた花里と竹内だったが、「その時である。瞑想のあと、一呼吸おいて、『大日本帝国万歳。万歳。万歳。』と、まなじりを決して、それはとても病人とも思えぬ大音声で叫んだ」と記述され (花里 1993:27-8)、ここに吉次郎の決意と達観の域を看取できる。なお、その後、吉次郎は「とたんにつぶしてしまった。精一杯の気力と体力を絞って、私らを諭して安堵したのだろうか。それから死を迎える日まで、本当に静かな日の流れ、苦痛を訴えることもない往生だった。時に昭和十

二年九月二十八日午前十時十二分だった」と（花里 1993:27-8）、ついに臨終を迎えている。

- <sup>22)</sup> 心労の募ったきのいについては、「父を失った母は、見るに忍びない落胆ぶりだったが、十七歳を頭にまだ乳を離れない子まで八人を抱えての日々の奮闘ぶりには、悲壮感があり、再び教壇に立つが、心身共々過労の重なった母には無理だった」と記され（花里 1993:28-9）、一方、「そんな中で、詰め襟服の私に、何とか背広を着させようと、栄町の洋服屋で吊しを試着した時、鏡の向こうに優しく立っていた母に、私は辛く当たっても、慰めされなかった悔いを、生涯負わなければならない」などと（花里 1993:28-9）、花里自身は後悔している。
- <sup>23)</sup> ここでの竹内は、一連の災難について、「教職労務と精神的緊張が引き続き、山積するなかで母は、私が出征入隊前の直前に死亡。大東亜戦末期、軍需工場が集中する名古屋地域への空襲爆撃はその極に達し、兄妹達は母の故郷上田へ疎開した」と認めている（竹内 1993:32-3）。
- <sup>24)</sup> 長女の上原は当時を振り返り、「母亡き後、私は兄達の食事と妹の世話と、無我夢中で過ぎました。両親亡き後、五十年以上も過ぎ去ろうとして居りますが、母代わりとして自分の力の限りしてきたつもりでも、今はもっともっと兄妹に尽くして上げなければいけなかったと反省しています」などと述べる（上原 1993:47）。
- <sup>25)</sup> 復員後、「両肺粟粒結核、痔ろう潰瘍あり、大気安静療法で先ず十年」と診断された竹内だったが（竹内 1993:33-4）、「長野赤十字病院北端の病棟に毎週訪れて下さったのが、ミス・ベーツである。はる枝の教會的配慮からの出来事である。その時、私には信仰的素養は皆無だったが、句作するその境地と聖書を通しての物語に精神的共鳴を覚えたのは事実だった。ミス・ベーツは忠孝一本という私の軍人精神的価値、その人生観を隣人愛と絶対的奉仕という世界観に止揚する豊かな導きをされ、高齢のためカナダに帰国された。私の信仰生活の基盤を構築して下さったのは、この婦人宣教師にほかならない」などと（竹内 1993:33-4）、人生における転機的一端をほのめかしている。
- <sup>26)</sup> 上田聖ミカエル及諸天使教会（水藤繁次司祭）について、「顧みるに素朴な事実

として、礼拝に遅れた時、礼拝に加われなかった時、司祭は決して指摘しなかった事である。更に正確に言及するならば、その事実に対して殊更に触れようとされなかった。だから却って信徒自身の主体的反省が、そこに生れた」などと (竹内 1989b : 387)、竹内なりに評している。

<sup>27)</sup> その一端は、「仏法は文字ではない。人間の真生活である。法悦は聴聞のものずきではない。『今生き、今働くことが、うれしい事と受け取れることが仏道を為した仏というのであり、往生したというのである』とする信念を貫こうとする浄土宗僧侶、故横内浄音師と深交のあったことである。司祭の実に粗末な居室に浄音師の立派な額がさりげなく飾られているのを、私は印象深く拝見したことがある。司祭は、横内浄音師のアイデンティティ (社会的立脚の基盤) に共感するところがあったのではないだろうか」などにも表出しており (竹内 1989b : 388、鍵括弧・丸括弧内ママ)、他方、「顧みるに素朴な事実として、礼拝に遅れた時、礼拝に加われなかった時、司祭は決して指摘されなかった事である。更に正確に言及するならば、その事実に対して殊更に触れようとされなかった。それなるが故に確信をもって、共に、ともに勇み行きたい」などからも窺え (竹内 1989a : まえがき)、ここに真の信仰や自発性とはいかなるものかが示唆される。

<sup>28)</sup> なお、「恩師ミス・ベーツは教団派メソジストの宣教師だった。しかし私の所属する教会、教派について全く指示せず、聖公会での洗礼に心から祝福してくれた。カナダ・ミッションの婦人宣教師達の日本伝道の戦略、戦術は幼児保育、幼児教育だった」などという文章にも (竹内 1993:36-7)、竹内がいかなる宗教的影響を受け、それがどのように実践化されていったのかのプロセスの一端が窺えるが、その詳細については、本稿の論点とは異なるため、別稿で述べたい。

## 史料

梅花学園梅花幼稚園 (2000) 『見まもられ・育まれて 100年 1900～2000年』梅花学園梅花幼稚園。

花里吉次郎 (1928a) 「聖徳太子褒貶論由来の研究」『信濃教育』(497), 頁数不詳 (=

『以和為貴——花里家の記録』6-17 頁に所収).

花里吉次郎 (1928b) 「聖徳太子褒貶論由来の研究 (その四)」『信濃教育』(506), 22-32.

花里吉見 (1993) 「父母の生い立ち」『以和為貴——花里家の記録』花里吉見, 22-9.

林 梅子 (1993) 「疎開先の生活 (神科村長島, 伊勢山の生活のこと)」『以和為貴——花里家の記録』花里吉見, 57-64.

木村礎校訂 (1967-1979) 『旧高田領取調帳 関東編』近藤出版社.

佐藤寅太郎 (1893) 「明治廿五年冬期間 (廿五年十二月ヨリ廿六年四月ニ至ル) 網走湾流水来去記事」『気象集誌』12(6),258-64.

竹内吉正 (1993) 「父親の里佐久の家のことども及び妹はる枝が追い求めた幼児教育」『以和為貴——花里家の記録』花里吉見, 30-7.

上原かをる (1993) 「思い出すことども・長女として」『以和為貴——花里家の記録』花里吉見, 40-50.

## 文 献

荒木敏夫 (1973) 「『聖徳太子研究』批判のための覚え書」『歴史学研究』(394), 28-33.

荏原順子 (2008) 「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』(6), 1-11.

鳩山春子 (1929) 『鳩山の一生』鳩山春子.

鳩山春子 (1990) 『自叙伝：伝記・鳩山春子』大空社.

本間 満 (2000) 「厩戸皇子の一考察」『東アジアの古代文化』(104), 113-23.

本間 満 (2008) 「聖徳太子研究のアプローチ」『アリーナ』(5), 213-7.

百貨店日日新聞社 (1937) 『大松坂屋の全貌 上巻 (松坂屋名古屋店)』.

市川武治 (1993) 『もうひとりの真田 依田信蕃』郷土出版社.

上村富江 (1997) 「上田市のホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー』ミネルヴァ書房, 247-57.

北佐久郡志編纂会編 (1957) 『北佐久郡志 第3巻 (社会篇)』北佐久郡志編纂会.

北佐久郡役所編 (1977) 『北佐久郡制史』 文献出版.

松坂屋 (2010) 『松坂屋百年史』 松坂屋.

松坂屋 50 年史編集委員会編 (1960) 『松坂屋 50 年史』 松坂屋.

宮坂亮一編 (1993) 『和を以て貴しと為す——花里家の記録』 花里吉見.

森 幹郎 (1972) 「ホームヘルプサービス」『季刊 社会保障研究』 8(2),31-9.

森 幹郎 (1974) 『ホームヘルパー』 日本生命済生会社会事業局.

森田 梯 (2002) 「学界動向 最近の聖徳太子研究」『弘前大学国史研究』 (112),  
45-55.

中寫 洋 (2010) 「家庭養護婦派遣事業の支援システムの形成に関する研究」『日本  
の地域福祉』 (24) ,71-83.

中寫 洋 (2012) 「竹内吉正における地域福祉論の形成過程と基礎構造」『日本の地  
域福祉』 (25),75-85.

中寫 洋 (2013) 『日本における在宅介護福祉職形成史研究』 みらい.

中寫 洋 (2014a) 『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』 久美.

中寫 洋監修 (2014b) 『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第3巻 家庭  
養護婦派遣事業——長野県上田市資料1』 近現代資料刊行会.

中寫 洋 (2019) 「家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ——上田市  
社会福祉協議会事務局長時代の竹内吉正を中心に」『社会福祉学』 60(3),1-13.

中寫 洋 (2020) 「ホームヘルプ事業の推進者が受けた宗教的影響と社会復帰過程  
——1950年代前半における花里吉正と婦人宣教師 E・L・Bates との関わりを中  
心に」『社会事業史研究』 (57), 39-51.

塩入 隆 (1992) 『長野県町教会百年史』 日本基督教団長野県町教会.

須加美明 (1996) 「日本のホームヘルプにおける介護福祉の形成史」『社会関係研究』  
2(1),87-122.

高橋勝介 (1931) 『婦人鑑 鳩山春子女史』 三友堂書店出版部.

竹内吉正 (1974) 「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を  
中心に」『老人福祉』 (46) ,51-69.

竹内吉正 (1989a) 「まえがき」『続 みつばさのもとに』 聖ミカエル及諸天使教会.

- 竹内吉正 (1989b) 「異質と協働の文化のなかで——信徒としての素朴な感想」『続みつばさのもとに』聖ミカエル及諸天使教会, 387-9.
- 竹内吉正 (1991) 「ホームヘルプ制度発足の周辺」『長野県ホームヘルパー協会 20年のあゆみ』第一印刷, 14-29.
- 上田小県誌刊行会編 (1968) 『上田小県誌 第三卷 社会篇』小県上田教育会.
- 上田市社会福祉協議会 50年の歩み編集委員会編 (2006) 『住民と共に歩んだ50年』上田市社会福祉協議会.
- 上田新参町教会 (1992) 『上田新参町教会百年史』日本キリスト教団上田新参町教会.
- 臼田 明 (2004) 「海軍記念日・御牧ヶ原大運動会 100歳の記憶——佐藤寅太郎・もう一つのアルピニズム・選手の系譜・記念塔」『信濃』56(3), 170-91.
- 和田 仁監修 (2000) 『目で見る高松・東讃の100年』郷土出版社.
- 山田知子 (2005) 「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大学研究紀要 人間学部・文学部』(90), 178-98.